

指導教官からの言葉

1. 教育を考える一言

「手を抜いてしまえば、いくらでも抜くことはできてしまう。」

2. 背景

これは、大学4年の教育実習でご指導いただいた先生から言われた言葉です。実習先は中学校で担当の学年は1年生でした。先生は、その年に赴任したばかりでしたが、大変馬力のある方のように、毎日たくさん仕事を抱え忙しくされていました。家に帰るのはだいたい午後10時とおしゃっていました。なぜそんなに多忙なのか疑問に思い、先生に尋ねてみました。すると先生は「手を抜いてしまえば、いくらでも抜くことはできてしまう。」と話しをされました。生徒が提出してくるノートに判子を押してしまえば、一応見たということにはなるけれど、もし漢字ノートの漢字がずっと間違っていて、それに気づかなかつたら、意味のない点検になってしまい、それでは生徒のためにならないし、生徒は先生が手を抜いていることは感づくものだからだということでした。その先生は生徒を一番に思って丁寧に仕事をしている、だから時間がかかるといことがわかりました。「手を抜いてしまえば、いくらでも抜くことはできてしまう。しかし、それではいけない。」先生の言葉が痛烈に心に響き、質問をした自分が恥ずかしくなりました。

3. 考察

中学校は激務だと知らされてはいましたが、なぜそんなに忙しいのか、そんなに遅くまで学校に残っているのはなぜなのか理由をこれまで知りませんでした。先生の言葉から生徒のことを大切に思う気持ちが自然と指導に熱が入ることにつながり、よって仕事も増していくということがわかりました。自分の生活を削ってまで、生徒のために仕事に励むことができる先生を目の当たりにし、私は中学校の先生にたいする印象が変わりました。生徒のために努力できる先生を尊敬しています。しかし、一人の先生がこなさなければならない仕事が多く、私生活まで犠牲にしているという現状を納得することはやはりできないように思います。本来、人を教育する人が一番人らしくなければ、生徒の手本とはなれないと考えます。しかし、大村はまは『教えるということ』の中でこのように述べています。

教師があつて教えることができ、それが私の生きがいでございました。じゅうぶんむくいられたと思います。子どもから何もお礼を言ってくれなくても、私はその生徒を教えることによって、自分の生活というものがあつたのです。私という人間のこの世にいたしるしにもなり、この世に生きた意味がたつたのです。

このように、教師であるという自分がすべてであるという人もいます。ですから、そのような方を否定できませんし、教師としての情熱ということを見ると私は不適な人間なのかもしれないと考えさせられるばかりです。

引用参考文献

大村はま『教えるということ』、共文社、1973年

大阪教育文化センター教師の多忙化調査研究会『教師の多忙化とバーンアウト』法政出版、1996年

児島邦宏『生徒に開かれた学校をめざす教育活動』第一法規出版、1995年